

(資料)

REFRANERO ESPAÑOL (32)

スペインの諺辞典

Bernardo Villasanz* (ed.)

新井 藍 子**

1218. Oro es lo que oro vale.

金^{きん}は 金^{きん}故に値打ちがある

- 物の値打ちというものは、単にそれを手に入れるのにいくら金^{かね}がかかったという物差しでは測れないという意味。(スバルビィ) 蛇足ながら、付け加えると、金^{きん}はその時その時の金^{きん}の売買の相場に関係なく、純粋に金^{きん}だからこそ値打ちがあると諺は言っている。(筆者)
- その他の“oro—金^{きん}”に関する諺をコレアス諺集の中でいくつか見てみよう；“Oro no es medicina, sino que el poseerlo lo es, porque da la alegría. 金^{きん}そのものは薬ではないが、所有すればそうなる、何故なら、喜びを与えてくれるから”，“El oro por eso claro, porque es raro. 金^{きん}は金^{きん}故に輝いている、何故なら、めったにないものだから”，“Oro quiero, que plata no me hace nada. 金^{きん}が欲しい、銀はわたしには満足感を与えないから” (高邁な精神を求めて平凡であることに満足できない者を例えて言う—コレアス), “El oro, y la tela, y la doncella, a la candela. 金^{きん}, 布地, 乙女はろうそくの下ではよく見える” (夜はより輝いて見えるので、選ぶ時はだまされるな—コレアス), “No es oro todo lo que reluce. 光るもの、必ずしも金^{きん}ではな

* Edición y revisión. Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.

** Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

い”（筆者の諺辞典，諺 1091 を参照して下さい）

1219. O tarde o temprano, los lobos comen al asno.

遅かれ早かれ 狼はロバを食べる

- どんなに用心していても悪人から善人は危害を加えられ，勢力がある者から弱い者は屈服させられるのが常である。（バロス）
- 同義の諺には “A la corta o a la larga, el galgo a la liebre alcanza. 遅かれ早かれ，猟犬は兎に追いつく”（筆者の諺辞典，諺 27 を参照して下さい），“a la larga, el galgo a la liebre mata. 結局，猟犬は兎を殺すことになる” などがある。
- 類義の日本の諺には “泣く子と地頭には勝たれぬ”，“主人と病気には勝てぬ”，“殿の犬には食われ損” などがある。また，これら反抗できない強い相手に対する処世術としての諺も次のようにちゃんとある；“長い物には巻かれろ”，“強い者には負けろ”，“大なる物には吞まれよ” など，庶民は所詮，権力のある相手にはおとなしく従っているほうが無難であるとおしえている。

1220. Otro gallo le cantara, si buen consejo tomara.

ためになる忠告をきいていたら
もっと良い運がめぐってきたらうに

- 上記の諺の前半 “Otro gallo le cantara” は，成句として今日でもよく使われている。“Otra mejor suerte sería suya—あなたの運はもっと良くなっていただろうに，もっと違ったことになっていただろうに，もっといい結果になっていただろうに” と同義。
- スバルビィ諺辞典には，異表現が次のように収載されている，“Otro gallo cantará en su gallinero, u otro gallo me, o te, o le, o nos, u os, o les, cantara.” これは，“Mejor sería mi, tu, su, nuestra, vuestra suerte. —わたしの，君の，あなたの，彼の，彼女の，あなた方の，彼らの，彼女らの，われわれの，君たちの，運はもっとよくなっていただろうに” と同義である。
- コレアス（諺集）によると，標題の諺は常に条件法で用いられる，例えば，“Si hubiera hecho lo que le dije, otro gallo le cantara.—もしわたしが言ったように，あなたがしていたならば，もっと違ったことになっていただろうに” とか，“Si hubiera atendido el consejo de su padre, otro gallo le cantara. もしあなたが，

あなたのお父さんの忠告を聞いていたならば、もっとあなたの運はよくなっていたのに”などのように。また、“Otro gallo me cantara, te cantara—わたしの運は、君の運はもっと良くなっていたらうに”など、すでに見てきたように、一人称、二人称にも用いられる。“Otro gallo le cantara”の直訳は“もっと違った雄鶏が鳴いたらうに”であるが、コレアスによると、この“gallo-雄鶏”は、ペトロに向かって鳴いた鶏であるそうである。

- ここでは、新約聖書の中でペトロの離反を予告するイエスの話しを思い出してみることとする；最後の晩餐が終わってイエスは十二人の弟子とオリーブ山へ出かけた。そのとき、イエスは“わたしは決してつまずきません”と言ったペトロに“あなたは今夜、^{にわとり}鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。”と言われた。イエスは、その後ユダに裏切られて捕らえられ、法廷に引き出された。そこにいたペトロは、人々から“この人はイエスと一緒にいた”と言われ、“そんな人は知らない”と三度否定した。するとすぐ、鶏が鳴いた。こうしてイエスの予言は成就されたのである。スペインの古い民謡には、イリバレン（格言の由来）によると、このペトロの話しが唄われているものがある；

“Si San Pedro no negara もしペトロが否定しなかったら
a Cristo, como negó, キリストを 否定したように
otro gallo le cantara ほかの鶏が鳴いたらうに

mejor que el que le cantó. 彼に鳴いた鶏より もっと上手に

また、同じ民謡集には、この替え歌が唄われている、男に裏切られ若い娘の嘆きとして、“Llegará ocasión que quizá cante el gallo de nuestra pasión. たぶん、わたしたちの恋情の鶏が鳴く日が来るであろう。……puede que algún día te cante el gallo. いつかあなたに鶏が鳴くかもしれない”

- 例題：ドン・キホーテ第二部 70 章、公爵夫人の侍女の一人に例のごとく悪ふざけにより、死ぬほどに惚れられてしまっても相手にしなかったドン・キホーテを見てきたサンチョは、心が慳の木のような相手を好きになった娘御が気の毒だ、“¡A fee que si las hubieras conmigo, que otro gallo te cantara! これで相手が、わしだったら、鶏の鳴き音もちがったらうに”（続編三、高橋正武訳）

1221. Oveja de muchos, lobos la comen.

大勢の持ち主の羊は 狼に食べられる

- 皆で共有しているものは壊れ易く、すぐに無くなる、何故なら誰もそれに関心を示さないから。(バロス)
- 異表現には “Asno de muchos, lobos le comen. たくさんの持ち主のロバは、狼に食べられる” (筆者の諺辞典, 諺 98 を参照して下さい) が、同義には “Unos por otros y la casa sin barrer. 出入りの多い家は、掃除されない” がある。

1222. Oveja duenda, mama a su madre y a la ajena.

ひとなっこい羊は 自分のママと
よそのママのおっぱいを 吸う

- 愛情とやさしさがあれば、何でも欲するものが手に入る。(バロス) 親切で心のこもったつきあいをすれば、相手からも好意とか情けを得ることができる。(スバルビィ)
- “Duenda—entremetida でしゃばりな, mansa 従順な” (コレアス) コレアス諺集には同義で次の異表現, “Ovejita mansa, mama a su madre, y a la extraña, y a toda la piara. ひとなっこい羊は, 自分のママとよそのママのおっぱいを吸う, 更にみんなに向かってピーピー鳴いてせがむ” が見られる。
- 同じ “oveja mansa—おとなしい羊” でも, 次のように反対の諺がある; “La oveja mansa, cada cordero la mama. おとなしい羊のおっぱいをすべての子羊が吸う” は, “Al que se hace de miel, se le comen las moscas. 蜜でできているものは, 蠅どもに食べられてしまう”, “Haceos miel y comeos han las moscas. 蜜のように甘いと, ハエどもが食べてしまう” (筆者の諺辞典, 諺 640 を参照のこと) などと同義の諺で, おとなしくて, やさしいと利用されたり, 餌食にされてしまうの意。

1223. Oveja (La) harta, del rabo hace manta.

満腹した羊は しっぽで毛布をつくる

- 満たされている者にとっては, 物事は全て簡単にいき, 良く見える。(バロス)
- “Oveja—羊” に関して次のような諺がある; “Oveja harta, de su rabo se espanta. 満腹している羊は, 自分のしっぽにおびえる” (快適な生活を送っている者は, いつ

もそれを失うことを怖れている—バロス), “Oveja chiquita cada año es corderita. 小さな羊は, 来る年も来る年も子羊である” (小柄な人は本当の歳をごまかすことができる—スバルビィ), “La oveja lozana a la cabra la pide lana. ふさふさした羊がヤギに羊毛をねだる” (物が不足している人に, 反対にそれをいっぱい持っているが, ねだっているのをあざ笑っている—バロス), “Ovejas, abejas y lentejas, todas son consejas. 羊, ミツバチ, レンズマメ, みんな格言である” (これらはことわざのように価値がある—バロス), “Ovejas y abejas, en tus dehesas, no en las ajenas. 羊, ミツバチは, 自分の牧草地で (飼いなさい), よその所ではなく” (自分の所で飼育すれば大きな利益をもたらしてくれるから—スバルビィ), “La oveja y la abeja, por abril dan la pelleja. 羊とミツバチは, 4月頃に命を落とす” (天気が悪くなって寒くなったり, 雨が降ったりすると死んでしまう—コレアス), “Ovejita de Dios, el diablo te trasquile. 神の子羊よ, 悪魔が毛を刈り取ってしまうよ” (偽善者に対して言う—コレアス)

1224. Oveja que bala pierde bocado.

メエ メエ鳴く羊は 食べ損なう

- 食卓でおしゃべりが過ぎる者をいう。(バロス) 計画の段階で楽しみすぎると, 実行が遅れてしまい肝心な事が遂行できないことをたとえていう。(スバルビィ)
- コバルビアスの宝典には, こうコメントされている, “Oveja que bala bocado pierde. 同訳” (食卓で仲間たちと夢中でおしゃべりしていて, 気がついたら皿がからになっていたことを指す—コバルビアス) “balar—羊独特の鳴き声をいう”

1225. Ovejas bobas, por do va una, van todas.

愚かな羊は 一頭が行くところに
ぞろぞろついて行く

- しっかりした自分の考えのない付和雷同的な人をたとえていう。
- コレアス諺集には “Ovejas bobas, por do va una, van todas ; o ovejitas bobas. 同訳” (共同体の集まりなどでよく見られるのは, 見かけの立派なある人物の意見に他の者たちが考えもなしに賛成する光景である—コレアス) が見られ, スバルビィのコメント (諺辞典) は, “悪い仲間が他のものに与える影響力はとても強いことをいう”

- 同義の諺には “Donde una cabra va, allí quieren ir todas. 一頭のヤギが行くところへ、ほかのヤギも行きたがる” (筆者の諺辞典, 諺 447 を参照して下さい)
- 類義の日本の諺には、他人の言うこと、することによく考えもしないで従うの意の “尻馬に乗る”, “君子は和して同せず小人は同じて和せず” などがある。

1226. Oye misa y no cuides si el otro tiene camisa.

人がシャツを持っているかどうかを
心配するより ミサを聞くがよい

- 他人の心配をするより、まず自分の義務を果たすがいいと勧めている。(バロス)
- 類義の諺には “Cuida de tus duelos, y deja los ajenos. 自分の苦労を気かけよ、他人の苦しみはほっとけ (自分の頭の蠅を追え、他人のことに干渉するな)” (筆者の諺辞典, 諺 362 を参照して下さい) がある。
- 類義の日本の諺には “人の疝氣^{せんき}を頭痛に病む” (他人の腹痛を心配するあまり、自分が頭痛を起こすことで、意味のないことに無用の心配をするたとえ—故事, ことわざ活用辞典), “隣の疝氣^{せんき}を頭痛に病む” などがある。

1227. Oye sus defectos quien no calla los ajenos.

他人の欠点をあげつらう者は
自分の欠点を聞くようになる

- 自分のことは棚にあげて他人の悪口を言う者を咎めている諺。自分の悪口を言われたくなければ、人のことも言うなとおしえている。
- 同義の諺が次のようにいくつかある ; “En el azogue, quien mal dice, mal oye. 市場で、悪口を言う者は、悪口を聞くようになる” (筆者の諺辞典, 諺 539 を参照のこと), “Ese oye sus defectos, que no calla los ajenos. 他人の悪口を言う者は、自分の悪口が聞える” (同諺辞典, 諺 584 を参照のこと), “El que dice lo que no debe, escucha lo que no quiere. 言ってはいけない事を言う者は、聞きたくない事が聞こえる”, “Oye y calla, vivirás vida holgada. 聞きなさい, でも黙っていなさい, そうすれば平安に生きられますよ”, また類義の諺には “El que escucha, su mal oye. 耳をそばだてる者は、自分の悪口が聞こえる” (同諺辞典, 諺 475 を参照のこと) “Escucha el agujero; oirás de tu mal y del ajeno. 穴に耳を押しあてる者は、自分

の悪口も他人の悪口も聞こえる” (同辞典、諺 579 を参照のこと) などがある。やたらに他人の秘密を詮索したり、噂を広めたり、悪口を言いふらしたりする者は、結局は自分も同じような目にあうとおしえている一連の諺である。日本ではこういう行いを“悪事身に返る”, “身から出た錆” などと言って戒めている。

1228. Oyó al gallo cantar y no supo en qué muladar.

雄鶏が鳴いているのを聞いたが
どこの掃き溜めか 分からなかった

- 或る事をよく知っていると思っている者が、本当はほとんど何も分かっていないような場合に用いられる。(バロス)
- コバルビアス (宝典) によると, “Oyó el gallo cantar, y no supo en qué muladar 同訳” が意味するところは “よく通じていない学問の教理を引き合いにだすような場合には, それが間違った, 或は, よく理解されなかった命題とか金言として残ってしまう” 他者の専門の研究の成果を, その道に通じていないのに, さも分かったかのようにあやふやな知識をひけらかす者は, いつでもどこにでもいるものである。
- 同義の諺には “Oír campanas y no saber dónde. 鐘が鳴っているのを聞いたが, どこで鳴っているかは知らなかった (ほんとうのところを見極めていない)” がある。スペイン語辞書 (スペイン王立アカデミー) によると, “俗語的表現 Oír uno campanas y no saber dónde の意味は, ある事を間違って理解したり, ニュースをゆがめたり, 歪曲すること”
- 日本には, その場しのぎに身につけた知識はすぐに底が割れてぼろが出てしまうの意の “付け焼き刃はなまり易い”, “付け焼き刃は剥げ易い”, “^{めっき}鍍金は剥げる” などがある。また, 正規な学習によって修得したのではなく, 単に人から聞きかじっただけの知識を “耳学問” という。

P

1229. Pacen potros como los otros.

子馬も 雄馬と同じように 草を食む

- 場合によっては、若い者が抱いている未来に対する考えを大人は軽視してはならない、多くの場合、彼らは年寄りや経験を積んだ者と同じように、正しく物事を見つめているから。(スバルビィ) 時によっては、若者たちの忠告も真面目に取りあげるべきである。(バロス)
- 次々と新しいものが出て来る変化の激しい現代では、若者の新しい知識のほうが年寄りの昔の経験より重視されている。このように時代に取り残されていくのは古い考えで若い人たちは、もはや自分たちより上の年代の意見など聞こうともしない。標題の諺を反対にして、時には年寄りの忠告も真摯に受けとめるべきであるとした意の諺にしたほうが今の世相には合っているのではなかろうか、つまり“Los otros pacen como potros. 雄馬も子馬と同じように草を食む”と。
- そうはいても、標題と同義の諺が次のように日本にもある，“負うた子に教えられて浅瀬を渡る”，“三つ子に習うて浅瀬を渡る”，“愚者も一徳”など、いずれも時には愚かな者や未熟な者から教えられることもあるという意。この解釈（故事ことわざ活用辞典）のほうがスペインの標題の諺にも合うのではなかろうか。スバルビィ、バロスともに“potro”を“jóvenes-若者”ととっているが，“potro”とは“歯が生え替わるまでの雄の子馬”で、日本の諺の“負うた子-背に負ぶった子”，“三つ子”と同じようなとても幼い生き物である、つまり，“potro”を幼い子供にたとえて，“時によっては、未熟な者から大人は教えられることもある”という解釈のほうがいいように思う。

1230. Padre (El), mercader; el hijo, caballero; el nieto, pordiosero.

父は商人 息子は紳士 孫は乞食

- 父は額に汗して働き、その父が稼いだ財産を息子が使い尽くし、孫の代には家は没落しているということ。
- コレアス諺集には次の異表現が見られる，“El padre, mercader; el hijo, caballero; el

- nieto, pidientero. 同訳” (pidientero とは, pedidor, mendigo, bordonero のこと—コレアス) ちなみに, “pidientero, pedidor は, 動詞の pedir-ねだる, 無心する, から又, mendigo は, 動詞の mendigar-物ごいをする, から, bordonero は, 動詞の bordonear-こじきをする, から来ている名詞でいずれもこじき, 物乞いの意—筆者
- 類義の諺には, “Limpieza y dinero hacen los hijos caballeros. 身だしなみと金で息子は紳士となる” (筆者の諺辞典, 諺 739 を参照のこと) があり, 同義には “Hijo de comerciante caballero, nieto pordiosero. 商人の息子は紳士となり, 孫は乞食する” がある。
 - 日本にも同義の諺が多数あるところを見ると, どこでも人間というものは同じであることがわかる。例えば, 金持ちの子は甘やかされてぜいたくに育つのでたいていは二代でつぶれてしまうという意の “長者に二代なし”, “二代続く分限なし”, 二代目は, 初代の苦勞を知っている所以その財産を守るが, 三代目は, 道楽が過ぎて, 使い果たしてしまうという “名家三代続かず”, “売り家と唐様で書く三代目” などがある。

1231. Padres (Los) a yugadas y los hijos a pulgaradas.

親はいっぱい 子はちょっぴり

- 互いに与え合う分量。(バロス) 子供の数が多いと, 親がいくら金持ちでも, 一人づつに当たる農地面積は小さい。(スバルビィ)
- “a yugadas-広い耕地面積” と “a pulgaradas-ひとつまみ分の量” を対比させた諺。バロスとスバルビィの解釈は異なっているが, 一般的には, 親は子がかわいくて, 物とか金, 特に愛情を子にたくさん与えるが, 親に養ってもらっている子は親にしてもらうのは当たり前と思っているのではなかろうか。たまには自分で稼いだ金で親にプレゼントする子もいる。それは, 親が与えてくれる量に比較すればほんの少しであろう。故にバロスの解釈のほうが自然であると思う。しかし, 成人して親の家から離れるようになると, 日本の諺がいうように “親子の仲でも金銭は他人”, “金銭は親子も他人”, “金に親子はない” となるのであろう。おうおうにして子はしてもらったことは忘れてしまうから。

1232. Paga lo que debes, sanarás del mal que tienes.

返済をすませよ そうすれば病いが治るだろう

- 借金がなくなれば、人は心安らかに人生を楽しむことができる。(バロス) 心配や気がかりから解放されたかったら返済の期日をちゃんと守るべきであると忠告している。(スバルビィ)
- コレアス諺集には次のような異表現が見られる；“Paga lo que debes, y después sabrás lo que tienes. 返済をすませよ、そうすれば後で、何を持っているかが分かるだろう”，“Paga lo que debes, sabrás lo que te queda. 返済をすませよ、そうすれば何が余っているかが分かるだろう”，“Paga lo que debes, y serás señor de lo que tienes. 返済をすませよ、そうすれば物持ちの旦那になれるだろう”など、一連の諺は、借金のない者は、金でも物でもためることができるとおしえている。
- 確かに、家とかマンションのローンを完済すれば、払えなくなったらどうしようかという気がかりから解放されてのびのびした気分になるだろうし、毎月貯金もできるようになる。いつの時代でも、借金があるということは、人にとって物質的にも精神的にも相当な負担となろう。借金取りが毎日押しかけてくるような生活なら病気になるのも不思議ではない。
- 日本の諺にはそういう心配事や不愉快なことは、病気を引き起こすという一連の諺がある；“病いは気から”，“百病は気から起こる”，“気軽ければ病軽し”など。

1233. Pagar justos por pecadores.

善人が 悪人の代わりに 罰せられる

- ある者が悪い行為をし、そうでない者がその結果に耐えることをいう。(バロス) 間違いや罪を犯した者が、懲罰をのがれ、潔白な者がその結果の報いを受けることをいう。(スバルビィ)
- 諺について、コバルビアス(宝典, 1611年)の説明を要約すると次のようになる；“世の習わしとして、たいていの場合、罪を犯した親のかわりに潔白な子が罰を受けるものである。そしてその親といえ、一時的にそのことで苦しむかもしれないが、暫くすれば、精神の状態がまた良くなるのである。潔白な子供が償う例として、ヘロデ王の時代に、王の命令によって殺された子供たちを上げることができる。(ヘロデ

王は、ユダヤ人の王が生まれたことを聞いて不安を抱き、その時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させたという新約聖書<マタイ伝 2-1-19>による一筆者) 諺の由来としては次のような事実が考えられる。;ある裁判官は、裁判で判決を下すのがあまりにも早いので、罪人に罪を軽くしたり、釈放したりするための適切な申し開きの機会も与えずに処刑してしまうことがある。そこからこのような諺まであるのである。<La justicia de Peralvillo, que ahorcado el hombre le haze la pesquisa. ペラルビジョの裁判は、絞首刑の後で判決下す> (筆者の諺辞典, 諺 720 を参照のこと) 本当のところは、ペラルビジョ村では、サンタ・エルマンダ (神聖兄弟団, 15-16 世紀のスペインの警察組織一筆者) は、盗んだ物が追剥ぎの手の中にあるのを見て、彼らの犯罪が明白だとわかってから矢で射止めるのである。また、彼らが捕らえられた場合でも、裁判なしに死刑に処すとは思えない、確かに彼らを牢獄にとどめておく期間が短く、取り調べや捜査が杜撰であるとしても。”

- 例題：セレスティーナ第 4 幕、やり手婆のセレスティーナは、メリベア姫に向かって、カリストの使いでたずねて来たこと以外に自分には罪がないのだから、自分を咎めるな、と諺を引用して言う、“No paguen justos por pecadores. 罪人の替わりに、善人が罰せられるものではありません。” (魔女セレスティーナ, 大島正訳) 注：ここでセレスティーナが言っている罪人とは、取り持ちの使いを頼んだカリストのことである一筆者。
- 日本には、大きな悪事を働いたものは罰せられずに、それにかかわって小さな悪事を犯した者が罰せられるという意の諺がいくつかある；“米食った犬が叩かれずに糠食った犬が叩かれる”，“皿嘗めた猫が科とがを負う”，“箆嘗めた犬が咎とがかぶる”など。これら罰を受けたものたちは、スペインの諺のように何にも悪いことをしていないのではなく、少しは悪事に手を貸しているのである。要領が悪い奴だと世間では言われている人たちであろう。こちらでは全く何もしていないのに無実の罪を負わせられることを“濡れ衣ぎぬを着せられる”という。

1234. Págase el señor de la traición, mas no de quien la hace.

裏切り行為には 満足しても

裏切り者には 満足しない

- 裏切り者は、その行為によって得^{とく}した者に、決して気に入られない。“Consumada la traición, no es necesario el traidor. 裏切り行為さえ成就すれば、もはや裏切り者には用はない”と同義の諺。(バロス)
- コレアス諺集には、次のような異表現が見られる；“Págase el señor de la chisme, mas no de quien la hace. 告げ口には満足しても、告げ口やには満足しない”，“Págase el rey de la traición, mas del que la hace no; mas de quien la hace no. 王様は裏切り行為には、満足しても、裏切り者には満足しない”，“Págase el rey de la traición, mas no del traidor. 同訳”など。
- 類義の諺には“A un traidor, dos alevosos. 一人の裏切り者には、二人の裏切り者で”（裏切り行為をする者には、裏切り行為で対抗するのがよい—スバルビィ，筆者の諺辞典，諺 112 を参照のこと）がある。類義の日本の諺には“人を謀れば人に謀らる”，“人を呪わば穴二つ”（呪い殺す相手の墓穴と自分の墓穴を指す），“人を憎むは身を憎む”などがある。

1235. Pajarito que escucha el reclamo, escucha su daño.

呼び笛を聞く小鳥は 己の災難を聞く

- 耳に心地よい言葉をそのまま信じてうっとりするものをたとえていう。(バロス)
- ここでは，“reclamo は、おとり用の鳥の鳴き声”
- 標題の諺は、どんな畏が待ち受けているかも分からないのに、相手に甘い言葉を囁かれて有頂天になり、その計略に乗せられることをたとえている。同義の日本の諺には“口に甘いは腹に毒”，“旨い物食わす人に油断するな”，“口に蜜あり腹に剣あり”（口では相手が喜ぶよううまいことを言いながら、内心は陰険で悪意をもっている様子—故事ことわざ活用辞典）などがある。

1236. Pajarilla que en erial se cría siempre por él pía.

野原で育った小鳥は いつもそこに向かってピーピー鳴く

- 生まれつきの性質とか癖は、一生変わらないものだというたとえ。
- 同義の諺には “La cabra siempre tira al monte. ヤギは常に山に登ろうとする” がある。こちらの諺のほうが、標題のそれよりスペインでは、口語的表現としてよく今日でも用いられている。たいてい人というものは、生まれつきの性質によって振る舞うものであるの意。
- 日本にも同義の諺が次のように多数ある；一番よく知られているのが “三つ子の魂百まで” であろう、以下 “雀百まで踊り忘れず”，“産屋^{うぶや}の癖は八十まで治らぬ”，“跳ねる馬は死んでも跳ねる”，“噛む馬は死ぬまで噛む” などが続く。スペインでもこちらでも、比喩に “小鳥とかヤギ”，“雀とか馬” など鳥類，動物を用いているのも同様である。

1237. Pájaro mal nacido es el que se ensucia en el nido.

育ちの悪い鳥は 巣の中で糞をする

- 自分の家族の悪口を言う者は、いい人間ではない。(バロス)
本来なら一番尊重すべきものについて平気で評判を落とすようなことをしたり言ったりする人をたとえていう。(スバルビィ)

1238. Pájaro durmiente, tarde le entra cebo en el vientre.

朝寝坊の鳥は 遅くなってから 腹に餌が入る

- 怠け者をたとえていう。(バロス) 生活の糧を得るために働こうとしない怠惰な人は、しばしば食事を抜くことがあってもいっこうに不思議ではない。(スバルビィ)
- “宵^{よい}つ張りの朝寝坊” なら朝食抜きが当然である。また、こちらの類義の諺には、“夏歌う者は冬泣く” (働けるときに働かないと後でその報いを受けて苦しむことになる)，“怠け者の節句働き” (ふだん働かないと休日に働かなければならぬ)，“怠け者の宵働き”，“無精者の一時働き” などがある。

1239. Pájaro que dos veces cría, pelada tiene la barriga.

年に二回 子育てする鳥は 腹の毛が むけている

- たくさんの子供を持って苦労している親の犠牲をたとえている。(バロス)
- さしずめ人間の場合なら、子供の学資や生活費など、多大な出費を強いられる親の“すね”が細くなると表現するところであろう。また類義の諺には“貧乏人の子沢山”，“律義者の子沢山”，“娘三人持てば身代潰す”，“娘一人に七歳明ける”，“娘の子は強盗八人”などがある。“娘”に関する諺は、それ特有の誇張表現が見られるが、現代より昔のほうが、確実に娘を嫁入りさせるには、全財産がなくなってしまうほど大変な費用がかかったのである。しかし、その反対の諺も次のようにある；“娘三人は一身代”，“娘三人持てば左団扇”など，“故事ことわざ活用辞典”によれば、養蚕や製紙に女手を必要とした土地のことわざだそうである。

1240. Pájaro triguero, no entre en mi granero.

小麦畑の小鳥よ うちの納屋には 入らないでくれ

- 悪習に染まっているような者を助けたり、家に入れてもてなしをするのは危険であるとおしえている。(バロス) 悪癖がある者を信頼してはならないと忠告している。(スバルビィ)
- 本質的に悪意を持っている人に、善意で親切にしてあげるとつけこまれるだけである。次のいくつかの諺“庇を貸して母屋を取られる”，“鉞を貸して山を伐られる”，“恩を仇で返す”は、その事を警告している。

1241. Pájaro viejo no entra en la jaula.

年季の入った小鳥は 鳥かごに入らない

- 経験を積んでいる者は、そうやすやすとは人に騙されない。(バロス) ある事柄に精通していたり、熟達している者を騙すのは易しくない。(スバルビィ)
- こちらにも動物をたとえて、年季を積んだ者には知恵があり、物事の方針を誤らないという類義の諺がある；“老いたる馬は道を忘れず”，“馬に道まかす”，“老馬の智”(韓非子)，“老犬虚に吠えず”など。